対象作品／M・マエノ著『ブルキナファソマリアムのサバンナ日記』偕成社

みんなで助け合う『ブルキナファソ』を読んで

弘前市立第三大成小学校　丹代音澄

「え、そんなきたない水を飲んでいるの。」

水の勉強で、水道が無い国のことを調べました。川の水を使う国や、遠くから水を運ぶ国もあって、びっくりしました。そういう国の生活を、もっとくわしく知りたいと思って、読み始めました。

この本には、あまり生活が楽では無い西アフリカの国、ブルキナファソのマリアムという女の子の生活が書かれています。

一番心に残ったのは、手伝いの量です。ぼくもおじいちゃんの畑仕事の手伝いをたまにしますが、ブルキナファソの子どもたちは、比べものにならないくらい、毎日いろいろなジャンルの手伝いをしています。たきぎ拾いに食器洗い、洗たく、水くみ、食事のしたく、畑をたがやす手伝い、はたおりの手伝い、一日の生活が手伝いだらけです。マリアムは、大人に近いのかと思ったら、まだ小学五年生だったので、もっとびっくりしました。学校で楽しく勉強し、サッカーをやって、友達と遊んでいるぼくの生活とは全然ちがいます。

次におどろいたのは、家族のことです。マリアムのお父さんには奥さんが二人います。回教は数人のつまをもつことをゆるしているので、こんなことになるのだそうです。ぼくのお父さんにもう一人おくさんがいたらいやだなあと思いましたが、理由が全然ちがいました。それは、子どもを多く産んで、働く人をふやしたいからだそうです。マリアムの村には病院が無くて、医者にみてもらうには、歩いて一日かかります。昔は四人に一人の子どもが病気で死んでいたそうです。ぼくは三人兄弟なので、何だかいやな感じです。たくさん死んでしまうからたくさん産むという考えは、ぼくたちが勉強している「たった一つしかない命を大切にする」という考えとはちがう気がして、少し悲しくなりました。

マリアムの生活には、まだおどろきがたくさんあります。朝は太陽が昇らないうちに、八百メートルはなれた井戸まで水をくみに行きます。皮ぶくろで水をくみ、約十キロもの重

さになるバケツを頭にのせて運びます。朝早くからそんなに重い物を運ぶなんて、ぼくにはとてもできそうにありません。学校の教科書は三、四人に一冊しかなく、ノートも買えないので、教科書を読んだり、先生が話すことを耳で聞いて覚えたりする勉強法だそうです。ぼくの当たり前は、ブルキナファソでは当たり前では無いことが分かりました。

ぼくたちはすごく便利な生活をしていて、豊かです。ブルキナファソの人たちは、豊かではないけれど、家族や地域の人たちで助け合って生活しています。子どもだからやらなくてもいいということはありません。ぼくは、物の豊かさになれてしまわないで、助け合って生活する、マリアムたちのまねをしたいと思いました。